

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19310151
 研究課題名（和文） 旧ソ連圏アジア諸国・地方における歴史的伝統の再定義と学術・教育動向に関する研究
 研究課題名（英文） Study on the redefinition of historical tradition and the trends of scientific research and education in the former Soviet Asian countries.

研究代表者
 岡 洋樹 (OKA HIROKI)
 東北大学・東北アジア研究センター・教授
 研究者番号：00223991

研究成果の概要（和文）：

旧ソ連圏に属したモンゴル、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、ロシア連邦サハ共和国について、社会主義期から体制崩壊後の歴史記述・認識とその教育面への反映の状況を、収集した文献と、現地研究者との協力を通じて比較検討することによって、相互の共通性と特色を解明する。とくにソ連圏崩壊後に各国で顕著な民族主義的歴史記述や教育が創出している歴史認識の特徴と社会主義期との継承関係を解明する。

研究成果の概要（英文）：

This study aims at comparatively interpreting recent trends and characteristics shared by and being developed in the post-soviet historiography of former Soviet socialist countries including Mongolia, Uzbekistan, Azerbaijan, Georgia and Russian Sakha Republic. Then the interpretation is focused on the characteristics of the nationalistic approaches of historical studies and education constructed by the countries and its inheritance from the socialist regime.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2008年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2009年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
年度			
年度			
総計	14,600,000	4,380,000	18,980,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：中央アジア

1. 研究開始当初の背景

旧ソ連圏アジア諸国では、社会主義体制崩壊後、旧体制を歴史的に正当化した理念的基盤である唯物史観の消滅により、独立ないし主権宣言後の国家的アイデンティティ確保

のために民族主義的歴史記述がなされてきた。しかしその歴史認識は、ロシアという中心を失ったことから個別に進められている。しかし各国の歴史認識を相互に比較し、その現状を解明した研究はない。

2. 研究の目的

本研究では、旧ソ連圏に属したモンゴル、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、ロシア連邦サハ共和国を事例として、社会主義期から現在に至る歴史認識・歴史記述やその学術・教育への反映の状況を、相互に比較することによって、各国の特質と、共通点を明らかにし、今後の展望を得ようとするものである。その際、特に近年顕著な民族主義的歴史記述・認識に焦点を当てる。

3. 研究の方法

各研究分担者は、それぞれの担当国について、近年の歴史研究・教育に関わる文献を収集・読解することによってその歴史記述の展開の特徴を明らかにするとともに、当該国における歴史研究者をパートナーとして、現地研究者の歴史記述展開に関わる理解・認識について情報を獲得する。各年度には、当該国の研究者を招聘して研究集会を開催し、ほかの研究参加者との間で議論を行う。これにより、現地の実情の把握を十分に確保しながら、歴史記述の動向の解明を図る。

4. 研究成果

3年間の研究により、以下のような理解が得られた。

(1) 社会主義体制崩壊後の諸国における歴史研究は、民族主義を枠組みとして進められている。その際、各国とも現在の共和国の淵源をソ連成立以前、前近代にまで遡らせて一貫した民族史の枠組みを設定した上で、ソ連社会主義期を民族の独立を脅かした偏向した時期として位置づけることによって、ソ連体制崩壊後の状況を民族史の本来あるべき姿を回復したものと立論している。しかし各国は基本的に社会主義期に成立した民族共和国の枠組みを継承したものであり、体制崩壊前の社会主義期との連続性が認められる。

(2) 民族主義的歴史記述は、ソ連体制への批判の上に成立しているものの、ロシアという中心の喪失後、これに代わる新たな方法的および地域・空間的枠組みを見出すことはできておらず、それぞれが孤立した歴史認識の構築を進めているように思われる。

(3) モンゴルの場合は、アジア・太平洋国家として自己を再定義したが、歴史的に密接な結びつきを有した中国（中華世界）との関係については、より対抗的な立場を崩していない。むしろ、同国の民族主義的史観は、社会主義時代同様中国を強く意識することによって成立している。モンゴルの場合は、民族史記述が基本的にモンゴル国の領域を枠組みとして行われる点は、他の諸国と同様であるが、中国領内の内モンゴルなどの国境外のモン

ゴル民族との関わりについては、とくに満洲時代（清代）の記述において、内外モンゴルを含める傾向が看取される。しかし国民の民族意識はモンゴル国民族主義に傾斜しており、このような歴史研究者の大民族主義的傾向は、必ずしも国民に共有されているわけではない。

(4) ウズベキスタンの場合、国家の枠組み自体がソ連初期に創出されたものであり、ソ連以前の歴史との関係の記述は、より人工的な性格を持つ。そこでは、現共和国領土の歴史を古代にまで遡らせて記述する社会主義期の記述方法が採られるものの、ソ連期には批判の対象であったティムールなど偉人の再評価と、ティムール朝期のチャガタイ語文学などに自己の淵源としての伝統を見出している。しかし帝政ロシアによる植民地化以前に存在したブハラ・エミール国などへの歴史的同一化は行われぬ。また、世俗国家としてのあり方をソ連期から継承していることから、イスラーム世界における位置づけも二義的なものに留まっている。

(5) アゼルバイジャンの場合も、ソ連期に成立した国家的枠組みであり、歴史認識も現共和国の枠組みを過去に遡及的に当てはめたものである。ウズベキスタンと同様に、現共和国の領域を歴史記述の地理的範囲としており、やはりイスラームやチュルクといった歴史認識のオルターナティブは採られない。1920年代初頭にソ連のアゼルバイジャンが関わったイラン・ギーラーン革命についてのアゼルバイジャン側の歴史記述も、社会主義期同様多くは叙述されない状況である。

(6) グルジアは、中央アジアとは異なり、古代に遡る国家的歴史を有しており、これを基盤として、帝政ロシアの植民地支配とソ連の支配が連続して批判の対象となる。世俗国家としてのあり方はソ連時代から継承されているが、中央アジア諸国に比べれば、歴史的な自己同一化は矛盾なく行われているように思われる。グルジアとアゼルバイジャンでは、相互の国境外に居住する同民族の言語・歴史教育の内容について、協力関係が作られつつある。

(7) ロシア連邦サハ共和国の場合は、ロシアによる征服以前における国家統治が希薄であったことから、その歴史認識全体がより構築的に進められている。そこでは、モンゴル帝国期に北上したとされるチュルク系遊牧民を祖先と位置づけるサハ民族史のみならず、「アイー」と呼ばれる民族宗教までが、知識人主導の下に創出されている。

(8) 複数の国について、社会主義期から現在

に至る歴史記述史の時期区分の理解に一致が見られることから、各国の歴史認識史理解に共通点が存在する。とくに、1920～30年代初等の民族的歴史記述、1930～1950年代のスターリン主義的歴史記述、1950～1980年代の社会主義的、改良主義的歴史記述、1990年代以後の民族主義的歴史記述といった区分は共有されている。

(9) 各国共に社会主義以後の体制の歴史的淵源を、19世紀末からの改革運動、特に1910年代後半から1920年代前半にかけて現れた自治共和国や独立共和国の存在に求め、社会主義期を民族独立に対する逸脱期としてとらえている。これは、世俗的近代国家としての起源をこれら短命な政権に求めるものである。ここから、ソ連の成立は、かかる萌芽的な近代的政権を外部から否定したものと批判が導き出される。

(10) 中心としてのロシアの消滅に伴い、国内におけるロシア語の比重低下と国際交流語化が進む一方、グルジアとアゼルバイジャンでは少数民族に対する言語政策で協力が見られる。民族の文字を維持したグルジアを除き、社会主義期の文字改革は、国民を前近代の歴史記述から切り離れたが、体制崩壊後の民族主義歴史記述の中にあっても、文字改革以前のアラビア文字やモンゴル文字復活の傾向は成功を見ていない。これは、旧ソ連圏諸国が、前近代よりもソ連期に基盤をおいていることの現れである。

(11) このように、これら五カ国の歴史記述には共通点と前体制からの連続性が認められる一方で、ロシアを強く意識する中央アジアやコーカサスと、中国からの独立というもう一つの課題をもつモンゴル、知識人を中心とした伝統文化、歴史理解の創出を進めるサハなど、各国独自の特殊事情、特色が認められる。グルジアにとってのヨーロッパ・キリスト教圏、ウズベキスタン・アゼルバイジャンにとってのイスラーム諸国、モンゴルにとっての中国のいずれも、直ちに歴史認識上の回帰の対象とはなりにくい。それゆえ、各国は、歴史記述上の共通性を持つ一方で、歴史的に属してきた各文化圏との歴史認識上の直接的な同一化を確立することは困難である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

① 岡洋樹、清朝の満洲・モンゴル統治、朝倉世界地理講座東北アジア、査読無、2009、130-139

② 高倉浩樹、エスニック・マイノリティの覚醒 伝統文化への傾斜：社会主義・多眠象k統治・国民国家をめぐる、朝倉世界地理講座東北アジア、査読無、2009、344-354

③ 高倉浩樹、シベリアの狩猟・牧畜をめぐる歴史と現代ロシア、朝倉世界地理講座東北阿爾あ、査読無、2009、301-313

④ Takakura Hiroki, The concept of manhood in post-socialist Siberia: The Sakha father as a wise hunter and a pastoralism., Sibirika, 8(1), 査読有、2009, pp.45-67.

⑤ 高倉浩樹、先住民問題と人類学 国際社会と日常実践の間における承認をめぐる闘争、「先住民」とはだれか、査読有、2009、38-60

⑥ 高倉浩樹、エヴェンキ、トナカイ飼育の崩壊と狩猟への転換、季刊民族学、124 巻、査読無、2008、pp.8-13.

⑦ 岡洋樹、一九世紀ハルハ・モンゴルの布告文にみる地方行政、清朝史研究の新たなる地平、査読無、2008、288-309

⑧ 黒田卓、変容のなかのイスラーム主義、インターカルチュラル5、査読無、2007、pp. 56-61

⑨ 黒田卓、ヘイダル・ハーンの事蹟再考、上智アジア学 25、査読無、2008、pp.192-215

⑩ 高倉浩樹、針葉樹林帯の景観に埋め込まれた資源の周期性と人々の畏怖：シベリア牧民サハ人の草刈とアラス、講座資源人類学 資源とコモンズ、第八巻、査読無、2007、215-242

⑪ 高倉浩樹、生業文化累計と地域表象：シベリア地域研究における人類学の方法と視座、講座スラブ・ユーラシア学、第二巻、査読有、2008、175-201

[学会発表] (計 17 件)

① 岡洋樹、清朝とチャハル部——清代外藩形成史上におけるチャハルの位置、明清史夏合宿 2009、2009年8月7日、岩手県一関市

② 岡洋樹、モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐる、国際シンポジウム「歴史の再定義」、2010年2月20～21日、東北大学

③ 黒田卓、「ギーラーン共和国」(1920-1921)を巡る歴史と歴史認識、国際シンポジウム「歴史の再定義」、2010年2月20～21日、東北大学

④ Takakura Hiroki, A strategy for differentiating the familiarity of animals: A consideration against the exceptionalism of arctic pastoralism, Social significance of animals in nomadic pastoral societies of the Arctic, Asia and Africa, 2009, May, 15-18. 東北大学

⑤ 高倉浩樹、ロシア＝ソビエト人類学史と少数民族 流刑政治犯・マルクス主義者・「ネイティブ」知識人の交差、日本科学史学会第148回東北地区例会、2009年6月28日、仙台

- ⑥ Takakura Hiroki, A transition from herding to hunting among Siberian “Evenki” The limits to the recognition of distinctive rights for indigenous peoples: A workshop organized by CAEPR and the school of archaeology and anthropology, 2009 Aug. 21, キャンベラ (オーストラリア)
- ⑦ 高倉浩樹、極限環境の生態人類学「生きにくい」環境を豊かに生きる、第 58 回民族自然誌研究会、2010 年 1 月 30 日、京都
- ⑧ 高倉浩樹、Politics and Religion in Pursuit of a History Nationalism in the Sakha Republic in the 1990s、シンポジウム「歴史の再定義」、2010 年 2 月 20-21 日、東北大学
- ⑨ 黒田卓、イラン社会主義ソヴィエト共和国におけるコムニスト政変をめぐる、イラン研究会年次大会、2009 年 3 月 28 日、大阪大学
- ⑩ 岡洋樹、清初のザサグ・ノヤンについて (モンゴル語)、モンゴル史研究の新動向、当面する課題 (17~20 世紀初頭)、2007 年 9 月 6 日、モンゴル国ウラーンバートル、科学アカデミー歴史研究所
- ⑪ 岡洋樹、民主化後モンゴルにおける清朝支配評価の変化をめぐる、研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育」2008 年 2 月 24 日、東北大学
- ⑫ 高倉浩樹、サハ共和国における歴史・文化認識の現代的位相：学術制度と出版物に対する分析、研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育」2008 年 2 月 24 日、東北大学
- ⑬ 黒田卓、1920 年代 ASSR 指導部の東方革命認識をめぐる、研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育」2008 年 2 月 24 日、東北大学
- ⑭ 北川誠一、南コーカサスのロシア語事情、研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育」2008 年 2 月 24 日、東北大学
- ⑮ 浅村卓生、ウズベク言語政策と文学史：ナヴァーイーと母音調和をめぐる問題、研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育」2008 年 2 月 24 日、東北大学
- ⑯ 黒田卓、アゼルバイジャン共和国における文書・文献調査、イラン研究者集会年次大会、2008 年 3 月 30 日、東京外国語大学
- ⑰ 高倉浩樹、民族誌情報と参与観察：人類学の方法と射程、東北民俗の会公開講演会「フィールドから何を掴むか」2007 年 6 月 16 日、仙台
- [図書] (計 5 件)
- ① 岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎 (編)、朝倉書店、朝倉世界地理講座東北アジア、2009、389 頁

- ② 岡洋樹 (編)、内なる他者=周辺民族の自己認識のなかの「中国」—モンゴルと華南の視座から—、東北アジア研究シリーズ⑩、2009、137 頁
- ③ 岡洋樹 (編)、モンゴル史研究の新動向、当面する課題 (17~20 世紀初頭)、東北アジア研究シリーズ (欧文版) ⑩、2009 年、218 頁 (モンゴル文)
- ④ 高倉浩樹、佐々木史郎 (編)、ポスト社会主義人類学の射程、国立民族学博物館、2009、1-28 頁、501-533 頁
- ⑤ 高倉浩樹 (編)、地域分析と技術移転：「はまる」「みる」「動かす」視点と地域理解、東北アジア研究シリーズ⑨、2008 年、134 頁

[産業財産権]
○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡 洋樹 (OKA HIROKI)
東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号：00223991

(2) 研究分担者

高倉 浩樹 (TAKAKURA HIROKI)
東北大学・東北アジア研究センター・准教授
研究者番号：00305400
北川 誠一 (KITAGAWA SEIICHI)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：50001813

黒田 卓 (KURODA TAKASHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：70195593

(3) 連携研究者

()

研究者番号：